

新しい町の空気を存分に吸った林芙美子

# 貧しさのなかの底抜けの明るさ

「貧しい文学少女」はモダン都市・東京で躍動する。

その日暮らしのどん底生活も、再生へと向かう都市の空気がエネルギーとなる。

「どんづまりの世界は、光明と紙一重」と書いた自活する一人の女性。

『林芙美子の昭和』の著書がある川本三郎さんに聞いた。

評論家

## 川本三郎

●かわもと・さぶろう 1944年東京生まれ。東京大学法学部卒業。91年『大正幻影』でサントリー学芸賞、96年『荷風と東京』で読売文学賞受賞。近著に『銀幕風景』（新書館）、『現代映画、その歩むところに心せよ』（晶文社）がある。

## 都市の作家・新宿の作家

林芙美子が尾道の女学校を卒業し

て上京したのは大正十一年（一九二

二）四月、十八歳のときです。『放

浪記』が改造社の新鋭文学叢書の一

冊として出版され、一躍、作家とし

て脚光を浴びるのが昭和五年（一九

三〇）七月で、二十六歳のとき。こ

の九年間、林芙美子は下宿も職業も

転々とし、その日暮らしそのもので、

まさに「東京放浪時代」と呼べるも

のでした。

『放浪記』といえば、地方での行商

生活や尾道のイメージを浮かべる人

が多いと思いますが、私はモダン都

市・東京が生んだ作家ならではの

放浪の青春記だと考えています。

日本のなかで突出したモダン都

市・東京——といっても華やかな銀

座などではない。具体的にいえば、

東京の郊外に誕生した新興の町・新

宿が生んだ作家による放浪の青春

記です。

大正十一年から昭和五年の九年間

の東京は、関東大震災（大正十二年）

をはさむ大変動期です。震災は下町

一帯に壊滅的打撃を与えましたが、

一方、それは東京再生の契機にもな

りました。

江戸、明治の町並みにかわって鉄とコンクリートによる新しいビルが建つてゆく。道路が整備される、隅田川には震災復興橋梁が次々に架けられる。現代の東京の原型が形作られていったのが、この時代です。町の雰囲気も風俗も「震災前」と「震災後」では大きく変化しました。

林美美子が上京したのは、まさに江戸・明治の古い東京が、モダン都市・東京に変貌しようとしていた、この時代です。そして、変わりゆく東京を全身で受け止め、時代の子となった——林美美子とはそういう作家だったと私は思います。

単身上京し、自活するのですから、家や古いモラルに縛られることはない。昔も振り返らない。新しい時代に向かって突き進むだけ。ただ高給で安定的な職業には就けないから非

常に貧しい。その貧しさは『放浪記』全篇に表れています。しかし陰々滅々とした貧乏話ではなく、底抜けに明るい。その日暮らしの貧乏のどん底なのに、明るさに満ちているのは、古いものを吹き飛ばしている時代の空気をたっぷり吸って生命力にあふれているからです。

同時に、林美美子の資質だと思っのですが、この人には物欲がない。あるのは、詩を書きたい、文章を書きたいという大きな夢だけです。夢はあるけど物欲がないということも、『放浪記』の明るさにつながっていると思いますね。

再生をめざし、壊滅状態から立ち上がるとうとする東京そのものが都市の青春時代にあるわけですから、その時代と自分の青春時代がぴったり重なった「貧しい文学少女」は、その意味では幸福だったでしょう。

話は飛びますが、戦後の林美美子にも同じことがいえます。敗戦後の混乱のなかで、林美美子は生き生きとします。古いものが壊れ、再生に向けて時代の空気が激しく動くとき、生き生きする女性。これも林美美子という人の特徴だと思えますね。

### いつも一人で貧乏に立ち向かう

東京の郊外に誕生した新興の町・新宿が生んだ作家だといいましたが、当時の東京にあつて、新宿は新しい町として登場し、新しい町ならではの空気が林美美子の生活を支えました。新宿が西へ西へと広がってゆく東京のターミナル駅としてにぎやかになってゆくのは、やはり震災後です。現在の杉並区、中野区、世田谷区といった郊外への人口移動によって、新宿は一大繁華街になってゆく。